

いましたが、現実となると愕然としました。残務整理を行い。武器一切を返納しました。

自宅へ帰ったのは、同じ四国にいたのに九月十二日でした。しかし村では早い復員で、早速お礼巡りをしました。礼場第八十六番礼所の「志度寺」、第八十七番の礼所「長尾寺」に帰還の報告と御礼を言上しました。金比羅宮は千三百段の石段を一気に駆け上がり、復員報告と御礼を申し上げました。私の家も長兄は南方戦線に従軍し、戦後PW生活をして二年後に復員しました。次兄は内地勤務の関係上逸早く復員しました。男三人が軍隊に行ったが無事に帰って来たことは両親にとつては最高の喜びだったと思います。

私も苦しいことも多々あったと思いますが、苦は忘れて、楽しいことのみが思い出にあります。お国のために身を投げうって働き、若き生命を捧げた方達の御冥福を祈り、二度と戦のなきことを念じています。

近隣の方たちとも至極仲良く、毎日が子供心にも楽しかったものです。また農繁期には家族全員が総出で一生涯懸命に手伝いました。

目の前には有明海が望みされ、満潮時には釣竿を片手に釣糸を垂れ、獲物を釣上げたり、干潮時にははるか沖の方までムツゴロウを獲りに行ったものです。現代の食料事情と異なり、あの頃はわずかな米と麦に野菜が主食でして、魚などは食膳には余り載らなかったものです。自家用の鶏か兎を料理して食卓に出すと、家内中が大変でした。思えば古き良き時代でした。もし現代で飼育中の鶏や兎を食膳に出すと、さしずめ親子断絶とか家庭不和、ひいては完全な離散状態に陥り、崩壊するでしょう。貧しくも心清きは人生の幸せでした。

なお部落は当時六十戸位でした。全戸の家の方達は福徳円満で、他人の家の子供も、自家の子供と区別無く可愛がり、時には本気で叱り、人道を教え導いたものでした。往時を偲び懐かしむは我れ一人に非ずと存じます。世間全般が貧しくも心

満州そして台湾防衛

佐賀県 石橋 正雄

私は、大正十四（一九二五）年二月十六日、佐賀県鹿島村で両親のもとに長男として出生しました。当時は祖母も健在で私を目に入れても痛くない。古い言葉にあります「我が子より出でて、我が子より可愛い」そのままに大変喜んで育てられました。その後、ふとしたことから母が病床に臥し、葉石の効なく不帰の旅に立ちました。家は農業で一町三反歩の田地と、畑が三反歩を耕地している状態でした。一応、世間的には中程度の生活でした。

母が亡きあと親類縁者が何や彼やと不都合、不便だろうと父親に再婚を勧めました。父も私のことを考えた末に再婚しました。その後、義母に弟と妹が出生しまして三人兄弟で仲良く、家庭内に笑い声の絶えること無き楽しい日々が続きました。

豊かな時代でした。

私も北鹿島尋常高等小学校を卒業して、家業を手伝いながら青年学校に通学しました。一週間に二日学校で、登校日には終日、語学並びに教練と確実に勉学を身につけました。教練は退役の陸軍中尉が教官でした。そして予備役の軍曹が教育係でした。時々除隊した軍人が教育助手として来ていました。お陰様で徹底的に教育されました。

明治大帝より帝国陸海軍人に賜った「軍人勅諭」は、序章から本文そして終章に至り、そして明治十五（一八八二）年一月四日、御名御璽まで丸暗記させられました。そして「作戦要務令」は全兵科の必須科目で基本となるのは「歩兵操典」でした。これらの学科を中心として、時事解説から政局の動きなどを学びました。

校舎外での教練では、心身鍛錬が第一義だと言って徒手体操にはじまり銃剣術と匍匐訓練で、終わりは早駆けの千メートルでした。

昭和十九（一九四四）年三月でした。役場の兵

事係が来宅して「徴兵検査通知状」を手渡しして帰りました。内容の要旨は、本年度徴兵検査は「一年繰上げ受検通知状」でした。なお二十歳壮丁検査が十九歳壮丁検査となり二カ年分同時受検となりました。兵員の補充が必要なのだと思いました。友達の中には、十七歳で志願した者もいました。

鹿島小学校の講堂で約五十余人が受験しました。私は覚悟していましたごとく案に相違して、徴兵執行官から「石橋正雄、甲種合格」と宣言されました。数日後に役場より「十月一日、久留米第四十八部隊へ入隊せよ」の決定通知状がきました。そして一言「充分身体の健康に注意されまし」とつけ加えてありました。

昭和十九年十月一日を迎えるに先だって先祖の墓前にお参りし、氏神様に武運長久の祈願を行い、親戚、友人とも別れの酒を酌み交わしました。これで後顧の憂いなくお国のために働けるのです。出発の直前に義母が物陰にて「正雄さん、絶対死んだら駄目よ。生きて帰って下さい」弱冠十九歳

中営門を後に列車に乗り門司に向かいました。関釜連絡の御用船に乗って釜山港に上陸、一路列車は北進しました。途中から日本海沿岸を走り、豆満江を渡り、いよいよ満州へ入ったなど戦友と語り合いました。

夜が明ける頃に列車が止まりました。牡丹江です。九州地方の軍人の多くが、この牡丹江にいると知らされていましたから、牡丹江なら充分に働けるぞと思いい、大地に一步を踏みしめました。出迎への古兵が大きな声で「足元が凍っているぞ。転倒に注意せよ」と。その声を聞いた時には、二人か三人が早くも引くり返っていました。

牡丹江には久留米第十二師団が駐屯しています。自分は歩兵第三六六部隊要員でした。そして東方の国境線に近い「国境警備連隊」に配属されました。荒寥たる平原に粗末な木造の平屋建ての建造物が幾棟もありました。その中の一棟が自分達の第十中隊です。軽機関銃中隊でした。歩兵部隊にも歩兵砲中隊、歩兵重機関銃中隊など種々な中隊

の俺にはこの「義母のために必ず帰るぞ」と胸奥に秘めて出征しました。

万歳の声と日の丸の旗に送られ久留米第四十八部隊の営門に入りました。着用の国民服から軍服へと着替え、一応兵隊さんの格好は出来ました。父親は目を細目にして「じーっと」見守ってくれました。口は真一文字に結んで男同志の無言の別れでした。

当時の皇軍（日本陸海軍）は東南アジアから太平洋全域に戦線を拡大していました。そして随所で強烈な米英連合軍の打撃を受けていました。空も海も敵に制圧され、弾薬は申すに及ばず糧秣まで補給が途絶していました。それでも大本営発表は「多大な戦果を納めた」と虚偽の報道ばかりでした。私達は戦後に真実を知った訳です。

自分達は入営と同時に満州の関東軍要員だと知らされました。親父に「満州だ」と言ったら、なんだか「ホット」したごとくに見受けられました。

十月八日、営兵が整列にて喇叭吹奏で送られる

や小隊が編成されています。

軽機中隊や軽機小隊は、一番敏速に行動出来る隊で、敵の意表を衝いた行動をする隊だといわれ、健脚行動部隊でした。兵営内外を問わずべて駆け足の行動でした。十二月末だった。全員牡丹江へ引き上げだ。すべて隠密行動で一夜の中に肅々とすべての行動をしました。自分達初年兵は古兵の行動を見習い、言動一切をまねし、遅れを取るでないぞと一生懸命でした。

十二月三十日、牡丹江着、即駅頭に整列して列車に乗車しました。古年次兵の情報によれば「関東軍の精鋭師団は全軍南方戦線突入だ」とのことでした。自分は運を天に任し、世に言う「天命を持つ」心境でした。旅順港で乗船し、次の停泊港は懐かしい門司港でした。この時「全員甲板上に出る事を厳禁す」と防牒上、軍隊の移動は隠密理に行われていました。二日か三日で船は出航しました。一月だというのに冬服から夏服に衣替えでした。いよいよ南方戦線だと思いました。

寒い満州にわずか二カ月いたのですが「懐かしい様な気がした」と戦友達と話し合いました。船は大陸沿いに航行していました。投錨して上陸命令で陸上に立つ時は「やれやれ」でした。自分はやはり陸軍歩兵だと思いました。

列車に乗車して南へ南へと進みました。地図では台湾は小さな島ですが、列車で走るとかなり南北に長い島です。二月八日に基隆、そして二日後に台南でした。二カ月程前まで第十師団が守備していたということでした。その後を受けて第十二師団(久留米・秘匿号、剣兵团)が台湾全域に、特に南東方面を守備しました。

師団の編成は、歩兵第二十四連隊(福岡)歩兵第四十六連隊(大村)、歩兵第四十八連隊(久留米)、野砲兵第二十四連隊、工兵第十八連隊、輜重兵第十八連隊、そして師団直属の師団の第十二師団通信隊、第十二師団兵器勤務隊、第十二師団衛生隊、第十二師団第一野戦病院、同じく第二野戦病院、第十二師団病馬廠等々の大移動でした。師団長閣

ただ毎日上空を米空軍飛行機グラマン、ロッキードなど戦闘機や爆撃機が飛来して要注意でした。超低空飛行してにわかには山陰から、時には椰子林のかなたから現れて機関砲や機銃掃射を行い、あたかも獲物を狙う狩師のごとくでした。自分達はその都度、一目散に走り、蜘蛛の子を散らすのごとくに退避壕へと突入しました。

台湾生活の中で一番嬉しかったことは、現地の農家の人達がバナナ、パイナップル、パイイヤなどの自家生産の果物を「兵隊さん、御苦労さん」と言って土産に持参して下さったことです。またそのおいしさは現代の輸入品と異なり、新鮮な上に完熟しているので、世に言う頬ぺたが落ちるようで、六十年経過した今でも「あの味は」忘れません。

またその頃、台湾出身の義勇兵が、もちろん志願した若者たちでしたが、入隊していました。ここで自分は思いました。私は軍隊入隊以来、何をしていたのだと。昨年十月一日入隊し、今昭

下は人見秀三中将で、第十方面軍に隷属しているとのことでした。

前述のごとく自分は軽機関銃小隊の小銃射手です。銃は九九式小銃で弾丸は重機関銃弾と同一の口径でした。三八式より飛距離は短い殺傷力は強いとのことでした。銃は常に護持していました。が、残念と言うか幸福といふのか、ただの一発も発射しませんでした。

自分達の中隊は基隆からさらに南方面、ガランビ灯台方向に向かって陣地を構築せよとのことでした。第一番に各人各個の蛸壺壕を掘り、引き続き横連絡の散兵壕を掘り進み、分隊長壕や小隊長壕は、二人用とか三、四人用で少し大きな横穴壕も掘られました。

海岸線の第一線から順次第二陣、第三陣と種々な場所を選び地形に合わせて陣地を構築しました。毎日朝から日没まで、土方仕事の穴掘りです。また食料不足を補うために畑を耕作して、薩摩芋(甘藷)作りに汗を流しました。

和二十年八月だ。実役十カ月余りの間、どこにおいても土方仕事の穴掘りのみだったことが心に残っています。ただの一度も銃弾を発射したこともなく毎日を過ごしました。殺生なきは幸だったのだなあと思います。

八月十五日正午前でした。「全員集合」の命令で整列しました。「ただ今からラジオで重大放送がある。心して拝聴せよ」とのことでした。それは天皇陛下の玉音放送でした。頭の中が真空状態に一瞬なりました、ラジオは雑音が多くて鮮明には拝聴出来ませんでした。ただ将校も下士官も先ほどまで威張っていた古年次兵等も、全員が「啞然」として自らを失って、ただ突っ立っていました。

「戦争は終わった。鉾を納めよ」です。
二、三日過ぎに全員武装解除だといって、将校の軍刀から兵隊の短剣まで、全部一カ所に取りまとめられました。もちろん重火器をはじめ手榴弾まで、人員表や武器弾薬表を整理していました。中隊事務室は大変だったと思います。

自分達は農作業に励んで芋作りが仕事でした。時には現地の漁民と一緒に地引網を引いて魚獲りを行いました。毎日毎日そのようなことで日を送っていました。そして引揚船の船待ちの日が続きました。

結局、昭和二十一年二月に引揚船が高雄に入港してきました。待望の時至れりでした。これが最後の行進だ、と気も晴れ、心も脚も軽やかに歩を進めました。そして乗船した船は静かに埠頭を離れ、「台湾よありがとう」そして「さようなら」と心から叫びました。

船は静かに台湾沖の大海原へと出ました。一路北進あるのみで、もう今は空襲も潜水艦の攻撃もない。右舷に朝日を見て、左舷に金波銀波の彼方に沈む夕日を眺めながら北進しました。平和というものは、言葉に出来ぬ喜びを自然に与えて暮れるものだ。二度と戦争の無きを念じながら船上に佇むは我れ一人だけではなかったのです。

部隊は九州健児が主力だったので、鹿児島上陸

行為、即ち「戦争」が地球上から消え去ることを望みます。そして各戦場や戦禍によって散華された多くの皆さん、敵・味方を問わず、御冥福を祈ります。

と知らされてますます一同は喜びました。あの懐かしき桜島の噴煙が目に入るころ、甲板上は賑やかな話し声と笑い声が入り乱れて一大歓声となりました。上陸して整列し復員式を形通りに行い、解散となりました。

自分は九州鉄道を北上し、熊本を経て八代海から懐かしの有明海が目に入りました。もう自宅に帰ったようでした。肥前の国鹿島は昔と少しも変わらず、我れを迎えてくれました。自宅の門を開けて、大声で「ただいま、石橋正雄帰りました」と叫びました。

一番先に義母が「お帰りなさい」と迎えて下さいました。これが何より一番嬉しかった。義母が実母以上に私のことを心配してくれたとのことでした。その一例は私が出征したその日から復員の日まで、毎回食膳に写真を飾って「陰膳」を供えて下されたことでした。現在の親でこのような事例があるだろうか。私の戦争体験の労苦は微々たるものですが殺さぬと自分が殺されるといふ野蛮

満州横断 台湾従軍記

佐賀県 溝 上 平 一

私は大正十四（一九二五）年四月五日生れで、当時の家族は父・廉一、母・ラク、祖母・カメに、姉・キクエ、妹・フミエ、初子、吉子、トミエ、弟・幸男、平八で、私は長男で、家族十一人の大家族です。

家業は農業で、米麦が中心です。米の収穫は反当り九俵ほど出来ていましたが、麦は反当り四俵ほどしか収穫出来ません。耕作面積は全部で二町八反歩ほどで、ほかに海面ではアサリ貝とカキの養殖をしておりましたので大変忙しい毎日でありました。今日まで皆元気で働きながら楽しく過ごしておりました。

姉妹弟達も今も近くに住んでいます。一人は自動車整備士になり、また教員をして、現在は退職している者も皆達者で暮らしているのが何より